

ふべし。此句は寫實の脱然としたる句なり、これを夜明の軍陣、拔駟の折のさまなど云へる解は、摩耶が赤松圓心が據るところとなりしことを思ひての惑なり。一句の調味、氣韻を觀て取るべし。小宮豐隆曰く、新古今集卷六、西行法師、秋しのや外山の里やしぐるらむ生駒の嶽に雲のかゝれる。野水が生駒を摩耶に換へたるを芭蕉等の手柄ありとしたるにはあらぬ歟と。如何にも雲のかゝれるといふ語は西行のを用ゐたるにもあるべし。されど生駒の雲の歌は、此句には辭近くして意遠し、比良の花の歌は辭疎くして意近し。前句には駒あり、頼政の歌の響の傳はれるを知るべく、後句には風あり、西行が時雨の一變もおもひやらる。武將詩僧、比良生駒を、野水が自家一坩堝に熔融して、一新様を鑄成し來れるなるべし。

夕飯にかますご喰へば風薫る

凡 兆

雲に夕、山のくもりに少し快き風、摩耶近きあたりの海にかますご、べた附ほどに附きたり。前人、ひさごの句のかますごとは異なりとして、此句のかます

ごは梭魚なりとなしたれど、非なり。たゞ彼れは春、これは夏なれば、少しの差あらむのみ。摩耶の下、須磨明石兵庫、かますごを出すを以て知らる。かますご喰へば風薫ると續けたる甚だ拙にして、かますごと風と何かのかゝはり有るが如くなれど、これはたゞかますご食ひ居るほどにと云へる迄なり。一句は明放したるところにて、夕飯喰ふほどの田舎の小家の生活のさまにて、夕風少し心よく暑氣を拂ひ行くに、ほつとして打仰ぎ見れば、摩耶が高根に雲のかかれるとなり、少し夕立氣もあるにや。

蛭の口處をかきて氣味よき

芭 蕉

口處はくひとと訓み來れり、咬みたるところなり。前句は小農のさま有り、こゝは其の田の草取りの晝の業の果て、後の夕のくつろぎに、痒きを搔きて嗚呼心よしとは、卑しく鄙びてあはれなるが中の眞率純實なるところなり。晋宋の人の風もかくやとをかし。

物おもひけふは忘れて休む日に

野水

鶯、雪駒、山、雲、夕食、かますご、風、蛭の口處、是の如くに實の重疊し來れる後には、また實を重ねるを忌む。虚をもつて附けて流さざれば、石多くして水無き溪の如くなるなり。此卷の千代經べきの句は、第五句なれど、芭蕉巧妙に捌きたる故、其後おもしろくなれり。それより又句數つもりて再び堆朶したれば、芭蕉蛭の口處の句に、半を虚にして流れを誘ひたれば、野水其誘ひに乗りて、實物は何も無くて感情のみなる此句を出したり。されば一句としては手柄も無く、面白くもなき句なれど、一卷にかゝる句をする人無くては、一卷の埒明かず、故に一卷に取りては功をも立て、面白みをも發する句にて、坐中の宗匠又は上足弟子の場合を見て身を挺いで、敢て作るべきものなるなり。此卷にては最初に芭蕉千代經べきの句にて巧みに捌きたり、野水の力もとより芭蕉に及ばざれば、此句は拙なりとの評を受くべけれど、一句立おもしろからぬにせよ思切りて流したるは流石に芭蕉の上足なり。野水元來情を以て情を敍す

る作者にて、象を以て情を敍するに巧ならざる上、此席の凡兆去來の間に挟まりたれば、柔術の道場にて兄弟子の弟弟子に投げらるゝこと多きが如く、手柄の立たぬ立場に置かれたり。但し此句の場にてなまじひなる工夫を用ゐんには、必ず夕飯の句のまはりに還るべし。夏の月の卷にて、芭蕉、此筋は銀も見知らず不自由さよ、と折角流し進めたるに、去來、たゞどひやうしに長き脇指と付けたるは、此時猶ほ未熟なれば是非は無けれども、打越の灰打たゝくうるめ一枚に戻る氣味ありて、手柄のみ立てんとする餘り、芭蕉の引きて呉るゝ手に絶らざるの陋を敢てしたり。それに比すれば此句はまだしもなり。扱物思ひは戀なり、人を戀ひて心の苦むも物思なれば、又戀のいきさつより人に恨み妬まれなどして心の晴れやかならぬも物思なり。こゝのは後のにて、何ぞ彼ぞの物思絶ゆる間無きが、宿下りの暇を乞得て親の郷に打くつろぎのうゝとしたるさま、今日は忘れて休む日といへる言葉に分明に見ゆ。昨日は花の都、今日は草の田舎、昨日は人多き中、今日は我儘なる家、白粉の傅けかたさへ濃い淡いのと云はるゝに、憚りしが、いざこざも無く針も刺もなき自然の天

地にたま〜蛭に咬れても、痒ければ痒いところをかく、痒いところも痒けぬ人前とは違ひたる風情を云へり。嫁御の尻に蛭がくひついたらと云へる田舎歌あり、其歌もし古く久しきものならば、此句を嫁の小姑ども煩さき中より親の里へ遊びに戻りし體と解して甚だ好し。いづれにしても戀の情ある句として解すべし、一句も然まで悪しからぬなり。

迎せはしき殿よりのふみ

去 來

一句も附意も分明なり。前句のに文字に一轉を下したるまでにて、甚だ幼稚の味も無く、興も無き句なり。

金鍰と人によばるゝ身のやすさ

芭 蕉

鍰はつばと訓まする俗用の字にして、鍰は霜鍰など、續く字にて、刀刃なり、刃傍なり、つばにあらず、鐔と改むべし。金鐔は黄金の鐔の義なれども、室町頃より此鐔行はれ、轉じては富有榮華にして時めける士といふ義となり居れる

當時の俗言なり。黄金の鐔は富みて華美を誇る者どもならでは用ゐるべきにあらず。自ら其富を衒ひ華麗を耀かすは、人の迎合せんことを欲する者の常なれば、俗言の中、聊か貶意をも含めるなるべし。思ふに遊里などより云出せる語歟。人によばるゝ中七文字に、作者が直ちにかゝる卑しき俗語を用ゐるに斟酌せるさま見えたり。一句は金鐔と人に呼ばるゝ彼の身のやすさよ、思ふまゝに遊び居りて、迎せはしき殿よりの文などを受くると、傍觀者、又は其の文使用する者の、我は世の常なみに苦みて日を送るまゝ、少しは憎み心より云ふところにて、かすかに金鐔に冷眼を向くる氣味もあるなり。舊解は金鐔其物にのみ心惹かれて、古き通用の語を知らず、人に云はるゝと、作者が特に餘計のやうなる語を下し置きところを會せずして、仇名ならんなど聽損じたり。前句べつたりとしたる愚句ゆゑ、流石の芭蕉も辛く轉じたることは轉じたれど、日比にも似合はしからず、丈低く卑俗にして宜しからぬ句をものしたり。後に支考等またかゝる調のところを用ゐて、これを文るに妄説を以てし、俗衆を瞞きて、燕村等出づるまでの間の蕉風の頹敗を致したり。

風呂屋といへば湯屋といふことになりたる故、風呂といへば湯といふことのやうに思はるゝに至りたれど、元來風呂は湯といふことにはあらず。谷川土清の如き、風呂は風爐の語より出でたるなど、解を下せる者もありてより、風爐は湯を沸かすの具なれば、風呂は浴湯を沸かし居るところと心得たるも有るべけれど、非なり。茶湯の設備をなせるところを御湯殿といひ、御湯殿日記の湯殿の如し、同じために風爐を置けるところを風呂屋といへる、甲陽軍鑑、品第三十三、信玄閑居の條は別なり。風呂は風爐より出でたる語にはあらず。人をして温浴を取らしむるをば湯屋といひ、湯に入りて浴するをおり湯といへることは、保元物語爲朝囚へらるゝの條に徴して知るべし。浴斛をゆぶねといへるは、榮花物語玉の臺の卷、宇治拾遺物語卷三、鳥羽僧正と國俊と戯むるゝ條、和名抄卷六、調度部に徴して知るべし。萬葉集卷十四の、土肥のかふちに出づる湯源氏物語の伊豫の湯、枕草子の七くりの湯、有馬の湯、玉造の湯、

詞花集千載集の有馬の湯、此等自然温泉をも湯とのみ云へり。湯もて身を洗浴するを湯あみと云へるは、枕草子、榮花物語、今昔物語等に見え、湯もて浴療するを湯でると云へるは、榮花物語鶴の林卷、本の雫の卷、宇治拾遺卷六、信濃國筑摩湯の條に見ゆ。浴室を湯殿といへるは、宇津保物語梅の花笠卷、源氏若紫卷、狭衣物語四、上卷に見えたり。湯屋の稱は、蜻蛉日記中卷、赤染右衛門集、宇治拾遺卷二、鼻長僧の條、沙石集卷四、頸縊上人の條、同卷八、燒經失目の條に見え、他人をして共に浴せしめざる、とめ湯といふ語も同條に見えたり。沐浴の衣を湯かたびらといへるは、和名抄調度部、榮花物語玉飾卷、延喜式卷廿一に見えたり。およそ古き代に於て、湯、湯あみ、湯でる、おり湯、湯ぶね、湯殿、湯屋、湯かたびら、とめ湯の語はあれども、風呂といふ語は見も聞きも及ばず、吾妻鏡卷十二、建久三年三月二十日の條、於山内、有百个日温室、往反諸人并土民等、可浴之由、被立札於路頭、是又爲法皇御追福也、俊兼奉行之、今日御分也、云々とある温室は、澡浴の處を稱せる漢語にして、和名抄の引けるところの温室經の温室即ち是なれど、當時湯屋といひし語に筆者が温室の二字を擬したるなりや、又或は温室と漢音も

て稱へたりしや明らかならず。風呂といふ語は鎌倉頃より漸く見え初めたるが如し。藤原信實の今物語に、念佛者のつちゆいふけつといふ僧、板ぶろに入りし滑稽談あり。其僧の目を病めるまゝ、目を結びふさぎて、風呂にもあらぬところを風呂と心得、裸にて隠し所も打出して、あなぬるの風呂や、と云罵り居たることを記せり。湯ぶねに入るべきならば、目は見えずとも、風呂の前に、わき戸の内において、裸にて打とけるべき譯無ければ、板ぶろといふもの、狀猜知すべし。太平記延文五年の條、今度の亂は併畠山入道の所行なりと落書にもし、歌にも詠み、湯屋風呂の女童部までもてあつかひければ云々とあり。湯屋風呂とつゞけたる言葉づかひ、考ふべし。應永二十七年の惠命院の海人藻芥にも、湯屋風呂とつゞけたり。於湯屋様々故實多之、當時其禮絶畢、於高野山者當時致其禮、云々入風呂時、可敲戸二三度、是禮也など、記せるを見れば、風呂といへるは湯ぶねにはあらず、敲くべき戸ありて而して開きて入るところなり。室町將軍家の式例を記したる年中恒例記の正月五日の條、及び五月五日の條に、伊勢守亭御風呂へ渡御と記せる、此の風呂如何なるものなり

や知る可からず、特に同日の條に、湯は湯にて別に記事あり。十二月二十九日の條にも、伊勢守御風呂へ渡御とあり。單に澡浴のためのみ、の事にはあらで、衛生の意に本づける祝の式かと覺しけれど、詳しくは知らず。甲陽軍鑑、品第二十五、山本勘介戰を論ずるに、喩を以てするの條、風呂はいづれの國にも候へ共、伊勢風呂と申。子細は伊勢の國衆ほど、熱き風呂を好み、能く吹き申さるゝにつけて、上中下共に熱風呂にすく。在郷まで大方村一に風呂一宛にて、既に夫あらしこまでも風呂吹くすべを存じ候は、熱き風呂好く故かと見え申候。ぬるき風呂に入りつけたる人は、熱き風呂少しもこたゆる事ならず云々。伊勢風呂と室町家に勢有りし伊勢伊勢守貞親一系と何等かの關涉ありや否やは知らず、勘介が此喩にて、伊勢風呂は即ち熱き蒸風呂なることを知らる。吹くといふは風呂にて口を尖らせて氣を吹けば、吹かれたる處に溫潤の勢集まりて、垢膩除き易くなるなり。ト養狂歌集、名を右衛門といふ若人風呂吹くこと上手なれば、これに花やかなる歌よめとありければ、詠める、吹く風呂のてんと其いきそれすいた世界の圖ぢやと名を右衛門殿。又同書、ある人風呂を

新しく建て、入初しけるに目出度歌よめとありければ、入風呂を祝ふて三度
長いきに吹とくく吹とくと吹く。此頃他人にも吹かせ、又新しく建てたる
風呂といへるも、蒸風呂にて、湯ぶねに入るにあらざりしこと知るべし。古今
夷曲集卷七題しらす直之めをとのみ入りぬる風呂はあかなくのせなにむか
ひて猶もいも吹き。此歌第三四五句甚だ巧にして、飽か無くに垢無く、背に夫
妹に芋をかけたなり。芋ふきといふ語、當時にありしなるべく、芋ざし芋つぎな
どいふ語の如く、あつき芋を吹くやうに吹くことならん。風呂の芋吹きとい
ふ語の昔に絶えて、大根の風呂吹といふ語の今に遺れるも思合はすべし。此
歌に照らして、家の風呂にて妻の夫の背の垢を吹きて搔くことなどの有りし
も思はれ、吹くといふ語によりて、今の浴室と異なること知らる。猶ほ風呂と
いふ語を考ふるに、醒睡笑に常にたくを風呂といひ、閉開の戸無きを柘榴風呂
とは、かゞみいるとの心なりとあり。鷹筑波集卷四、入る人の身もやあからむ
柘榴風呂とあり。鏡を研ぎ水銀を傳くるに柘榴の酸を用るしより、屈みて入
る風呂を柘榴風呂とは云ひしにて、常の風呂には必ず開閉の戸ありしこと、海

人藻芥の文を合せ考ふべし。貞徳文集の桑風呂は、柘榴風呂とは異なりて桑
樹を實に用ゐるなり。八瀬の竈風呂は今も存す。これは大なる土竈を其儘
風呂に用ゐて人其内に入るなり。此等を合考して、風呂といへるは本来閉き
りたる一室なることを知るべし、今言ふごとく湯ぶねにはあらざりしなり。
蓋し風呂は擬字にて、風爐より出でたる語にあらずむ、ふは自然の通音なれ
ば、ふろはむろより轉じたる語ならむ。むろは室、窖をいふ、大室、新室、無戸室等
の古語、植木窖、麴室などの今語によりて其義を知るべし。ふろも此のむろに
同じく、初は風を遮り暖を保つの一區、圍ひ立てたるところを云へる故に、湯屋
風呂とつゞきても云へるなり。漆を乾かしむる一圍ひを東京にて風呂とい
ひ、物を藏むる押入様の一圍を越後にてふろといひ、武士の一時隠れする虚無
僧の居處を風呂といふも、皆むろの轉なれば異とするに足らず、既に和名抄に
は、うるしむろの語さへ見えたり、ふろのむろに本づけること思ふべし。我邦
上古の風は冷浴を取る、みそぎはらへの語證すべし。自然の温泉に浴するこ
ともやがて行はる、各温泉地の傳説、證すべし。佛家の習の傳はりて、温浴行は

る、中世温浴の記事、佛寺に因める多し、これ證すべし。鎌倉の末、室町の頃より熱浴汽浴行はる、風呂の語の其頃より頻出せるによりて證知すべし。一方に桃山前後より温浴又行はれ出し、する風呂次第に盛りて、元祿より後は漸く温浴も汽浴も混亂して、分別し難くなり、天明頃には蒸風呂大にすたれ、山東京傳骨董集に蒸風呂の事を説けるも、既に風呂にて飲ましむる「ちらし」の湯を、かり湯のことなりと誤り想へるほどに蒸風呂には疎くなり、明治に至りて東京築地に療養の爲にたゞ一軒遣り居しが、それさへ亡びて、今は温浴のみとなり、風呂といひて湯ぶねと思ひ、風呂に入るといひて温浴することのやうに思ふに至れり。元祿よりは後の八文字屋が色三味線には猶ほ、水風呂より湯風呂が徳なれど、こしらへることを造作に思ひ云々と記して温浴汽浴の別を明らかに示せり。水風呂は今訛りて居風呂といへるなるが、蓋し行水風呂の略なるべく、古き書には皆水風呂といひ、遺老物語には高麗陣より初まるといへり。湯風呂は即ち蒸風呂なるが、風呂即ち室を造ることの面倒なるが爲に然は云へるなり。水風呂と湯ぶると相對して云へば猶ほ分明なれど、水風呂といふ

語出で、よりならむ、温浴汽浴は混亂して温浴するをも風呂に入るといふやうになり、汽浴廢れて、風呂の語遂に本を失ひ他を奪ふに至りたるなり。水風呂は江戸にては慶長頃大谷隼人といふ者造り出し、が、上方には前々より有りし由、三浦淨心が見聞集卷六に見えたり。扱錢湯の風呂は天正十九年夏、伊勢與市といふもの、錢瓶橋のほとりに創立せし由、同書卷四に見ゆ。室町の頃の伊勢伊勢守、武田信玄頃の伊勢風呂と、此の伊勢與市と何の關係ありや否やは知らねど、皆伊勢といふもの、風呂にかゝはれること考ふべし。或は風呂は伊勢伊勢守より創められ、又は大に改良されて、伊勢守所縁の地の伊勢に行はれ、諸國これを學びしにもや、小田原の伊勢新九郎は伊勢守の系の後なるが、小田原侍の果なる三浦淨心が頻りに風呂の事を記せるもをかし。淨心記して曰く、風呂錢は永樂一錢なり、皆人めづらしきもの哉とて入給ひぬ、されども其頃は風呂不鍛鍊の人あまた有りて、あら熱の湯の雫や、息が詰りて物も言はれず、烟にて目も開かれぬなどと云ひて、小風呂の口に立塞がりぬる風呂を好みしが、今は町毎に風呂あり、鑑十五文二十文づゝにて入るなり、湯女とい

ひて、媚ける女ども二十人三十人ならび居て、垢を搔き髪を洒ぐ、扱又其外に容色儔無く、心さま優にやさしき女房ども湯よ茶よと云ひて持來り戯れ浮世語りをなす云々。又記して曰く、欲垢煩惱深き葎原町の古狐にばかされて、今宵こん、明日の夜もこうくと云語らひて、皆人あつ風呂を吹きあへり云々。此の風呂屋發達して遊蕩の家となり、風呂の介抱人たる湯女も初は垢を搔きしより、西鶴が一代女の五に見えし如く、猿など、呼ばれもしたりけんが、漸く立上りたる賣女となり、落穂集に見えたる如くに金屏風など引廻し、綺羅をかざり、絃歌をなすやうになり、明曆に至りて遊女町成立つに至りしなり。されば江戸吉原は風呂屋の發達して成れるものといふべし。江戸は市中廓清の業成りて風呂屋は單なる浴場となり、湯女は吉原に驅入れられたれど、京坂地方にては猶ほ其風遺りて、娼家やうの家は何れ風呂といふもあり、湯女に嬌名を傳へらるゝもありて、西鶴芭蕉の頃には、或は上びたるもあり下びたるもありしなるべし。此句、淨心が文の、欲垢煩惱深き葎原町(後の新吉原にはあらず)の古狐にばかされて今宵こん明日の夜もこうくと云語らひて皆人あつ風呂

を吹給へり、とある其あつ風呂好の人の宵々の月なり、さらずば宵々の月、をかしくも面白くもあるべからず、俳諧無きに近し。あつ風呂好は蕩子、浪子と云はんが如し。金つば宵々の月に照りて好し。前句と此句とのかゝり、此句の人の雑談の口頭の語とするもよし、又單に句なり響なりとするもよし、附きたる味はおのづから會すべし。ト養が狂歌に、金鏝に似たる今宵の月の影させくよござんしよてんとよござんしよ、といへるがあり、下の句は當時の流行小唄なり。前句の金鏝此句の月、一首の中にありて、しかも何となく響くとこゝろあれば、思出せるまゝに擧ぐ。

町内の秋も更行明やしき

去 來

月下に見たる町内のさま、秋も更行く明やしきは作者の機轉なり。屋敷は地なり。明屋敷は住宅あるべき地の空しくなり居れる也。明やしきいと好し。

何を見るにも露ばかり也

野水

何を見るにもと云ひ、露ばかり也と受けたる、如何にも好し。かゝる句無く
ては一卷埒無くなるを、野水おのが功をすて、すらりと流したる、しかも一句
立も悪しからぬ、芭蕉も破顔して此の水の如き句を賞したらむ。

花と散る身は西念が衣着て

芭蕉

西念は西行の師にして西山勝持寺の上人なりと俗書西行傳を引きて釋せ
るあれど、取り難し。西行の傳は、西行一生涯草子など古けれど、同書には、嵯峨
の奥の聖の許へ其曉走りつきて出家しけるとのみあり。撰集抄にも、西念を
師とせるの事は見えす。法念上人の弟子に西念といふはあれど、西行は法然
の孫弟子などにもあらず、此句の西念を強ひて西行の師なりとするにも當ら
ず。たゞ前句に露ありて、西行遁世の時の歌、露の珠きゆればまたも置くもの
をたのみもなきは我身なりけりとあるより、此句に何となく西行の倂を思浮

めて、然は云ふめれど、露に無常觀は西行の歌より始まるにもあらず、如露亦如
電の經の文以來、甚だ古りたることなり。此句の西念、まことに西行の師に然
る人ありて、それを云へるとならば、一句まことに究屈なる拙きものなるべし。
竹齋、高尾、文珠、盤特、小町といふやうに、直ちに人名を擧ぐる時は、誰も知りたる
人を擧ぐるが俳諧の例なり、俳諧は傳記實錄にもあらず、世説蒙求やうのもの
にもあらず、人も餘り知らぬもの、名を呼立て、べとりと事實に貼きて句を
作ることにはあるべからず。此句の西念はたゞ西方念願の人といふほどに解
くべく、而して其をさる人あるやうにしたる詩の幻術なり。花と散るは言葉
づかひ少し無理なれど、花の如く散るとのみにあらず、花と與に散る也。然
らざれば花の句とならず。山家集、上、もろともに我をも具して散りね花浮世
を厭ふ心ある身ぞ。此歌此句、語連なり意通ず。西行嵯峨にて世を遁れ、最初
居たるは法輪寺の南にて、櫻下の小庵、後に櫻元菴と呼ぶところ、巨櫻ありて西
行櫻といひ、謠曲西行櫻一関、人の知るところ、元祿頃には右の山田村なる櫻も
庵も人に親しかりしなれば、花と散るの一句、浮きたる辭にはあらざりし也。

木曾の酢莖に春も暮れつゝ

凡 兆

酢莖は菜の類の莖又は根を湯がきて無鹽に漬くる漬物なり。即ち是れ周禮天官醢人にいへる五齋七菹の齋の類にて、蘇易簡の謂はゆる仙厨の鸞脯鳳胎も及ばざる氷壺先生なり。木曾のみにはあらず、京都にても之を漬け、江戸にても稀には茶人など之を製すれど、木曾福島のもの好事の人の間に嘖稱せらる、冬末より春暮までの季の物なり。春も暮れつゝの語、酢莖も老い春も盡きんとするにつけて感慨の情あり、抖擻行脚の人の此處に七日、彼處に半月の修行の中に、節物の推移に驚かされて黯然愴然たるさま言外に見えて好し。

かへるやら山陰傳ふ四十から

野 水

かへる四十雀は春の季なり、來るは秋なり。山陰傳ひて歸り行く小さき鳥を凝然と見たる風情、前句の酢莖に感の動きたるに響きあひて甚だ幽妙なり。淺間山の吾が小廬のあたり、四十雀の巢の稀ならず。夏猶寒く山荒れて、人氣

すくなく、石横たはり林樾茂りたる中に歸りて、子を設け住める此の小禽の、春に當りて岨陰傳ひ草樹傳ひに里より山に入りたらんさま想ひやられて、淋しくあはれに一種の物悲しき心地せらる。歸るには疑ひなけれども、小さき禽の上下し左右して、行くが如く戻るが如く樹移り枝移りし居るところを、歸るやらと打眺めたる、やらの二音に無限の情味ありて、前句の酢莖を含み、此句の四十雀を見つむれば、平淡の中に眞趣をにじみ出さす猿蓑の詩風の人を襲ふものあるを覺ゆ。

柴さす家のむねをからげる

去 來

さすといふ語に泥みて解すれば、柴は小木散材にして粗朶のことなる故に柴さすは藩籬など繕ひ治むるやうに聞ゆれど、さては棟をからげると別の事になりて、家とのつゞき不束なり。屋の茅の薄く疎になりたる茅を添ふるを、さし茅するといひ、籬の竹の朽ちたるを去り新しきを加ふるを、さし竹するといふ。さすといふ語をさし茅、さし竹のさすの如くに取れば、柴さすを屋の上

の事とする時は、柴を茅屋藁屋に突立つるやうになりて意義を成さず。これは然にはあらず。凡そ茅屋藁屋の棟、其のよろしきものは、大なる瓦もて之を包む。所謂棟包の瓦もて棟を包めるなり。次なるは割竹を棟に跨がせ、丸竹を棟に添はせて、銅線又は蕨繩椶欄繩等をもて之を綴づ。尤も略せるは別にこれといふこともせず、たゞ棟のわたりを茅又は藁もて一段厚く葺き、或は蝴蝶花を植ゑなどして之を綴づ。風烈しき地などにては丸太にて合掌をつくり、神社の千木の如くしたるを棟を跨がせて置くもあるなり。此綴ぢむることをさすといふ。鎖をおろして門さす、栓をおろして戸さすといふが如し。二を一つに寄せ綴づるなれば誘ふといふ語とも通ずるかとおぼし。又此の綴ぢむるものを名詞にし、扱首の字をあて、さすといふ。茅葺の屋はすべて綴ぢ作るものなり、故にさすといふ詞甚だ多く今に用ゐらる。棟より屋端に至るを「平さす」と云ひ、棟端より屋角に至るを「追さす」と云ひ、兜桁より軒桁に至るを「切さす」といひ、屋根を負ふ極の竹を「さす竹」といふ。棟に傍はせ、又棟を跨がする竹の代りに、良き竹乏しき地にては柴を用ゐることもありて棟を綴ぢ

固む。其の造營又は修繕のところを、柴さす家の棟をからげるとは作れるなり。言葉づかひ今に遠ければ異様に聞ゆれど、又言葉づかひ少し拙なれば疑はしくもあれど、柴を茅屋の棟に用ゐるを目にしたる者には、少しの疑も無き山里の景にて、四十雀歸る樹蔭の映り、さしたることも無き句なり。

冬空のあれに成りたる北風

凡 兆

一句平明、聯感順應、解を要せず。

旅の馳走に有明しをく

芭 蕉

有明しは有明行燈にはあらず。有明行燈は略して有明と云へど、それは有明といふ語に本づく。有明しは、あかしといふ語に本づく。あかしは燈火をいふ古き語にして、既に和名抄にも出で、又今も猶ほ用ゐらる。ありあかしは其儘にある燈火なり。此句旅室に有明行燈、寢覺烟草盆、夜具も定めし厚かるべき風情など、前人は釋きたれども非なり。有明行燈は小さきものにて、枕

頭などにもあるべし。有明しはや、大にして、持行きなどはせざるもの、臺所に吊り置き、又は肆の前に居る置き、乃至は廣き廊などに置くものをいふ。常燈明なども有明しの一なり。後に八間（ハチケン）などいへるものも、これを點け徹す時は有明しともいふ。有明行燈と有明しとは語近けれど意異なり、其物もおのづから異なるなり。此句まづは峠下などの旅亭のさまなり、馳走の二字を能く聽き、前句の景を能く視るべし。奥まりたる室内の事にはあらず。馳走の二字、さびありと云へる三冊子の言よし。淋しき體とのみ云ひては足らず、さびありて働きある句なり。

すさまじき女の智慧もはかなくて

去 來

すさまじきに秋をもたせ、七五の詞におぼろげに戀を持たせたる句なり。今少し力あるおもしろき句あるべきところなれど、其時其人のかく附けたるなれば是非なし。冷ましき女は、老女の化粧したるなりなど、釋したきも、然のみ云はんは作者に氣の毒なるべし。詞のつゞけさまに、少しは然る意も見

ゆれど、こゝは枕の草子を用ゐたり。舊註枕の草子を引きて釋せるもあれど、大進生昌の條を引きたるをもて、事情全く副はず、人をして笑を發せしめたり。こゝは前句をよく觀よ、旅より歸る人を待ちて、常はせぬ臺所に有明し置き、心をも以て、物をも以て、馳走せんとし居るところと取るべし。然るに待てる人は來らず、心構も智慧もはかなくて、孑然凄冷、舊に依つてすさまじき女ひとり存せりと作れるなり。舊解の如く、大進生昌の家の條をいへり、又は有明行燈の光に人目せられて忍び行き難きを云へりなどいふならば、芭蕉も何ぞ此句を可とせんや、去來此時未熟なりとも如何ぞ然る愚句をものせん。枕の草子、すさまじきものゝ條、待つ人あるところに、夜少し更けて、忍びやかに門をたゞけば胸少し潰れて、人出して問はするに、有らぬよしなき者の名のりして來たるこそ、すさまじといふ中にも返すくすさまじけれ、とある段を、草子にては忍ぶ中なるを此處にては俳諧にして、有明し置いて人待てるとし、扱、すさまじき女の智慧もはかなくて、と其事のかひなくなりしを悲しむやうにも少し嘲むやうにも作りたるなり。すさまじき女とつゞけたるによりて、其女も見ゆ

るやうなれば、又其の據れるところも事情も見ゆ。初五の妙無くば俳味甚だ乏し。思ふに芭蕉の加朱や有りけむ。一句の着想幼きことは幼けれど、仕立柄の力もてみづから保つを得たり。

何おもひ草狼のなく

野水

前句戀の句なれば、此句も勿論戀の句にして、此句殊に好し。おもひ草は阿蘭陀烟草管といふ草なりと云ひ、露草なりといひ、龍膽、女郎花なりなど、いへれど、其の詮義は此句を解するに用無し。舊註、前句のすさまじき女を狼になぞらへたる、いとをかし、など云へる、餘りに誣説妄言にて、口惜くもまた腹だし。萬葉集卷十、道のへの尾花がもとの思草、今更になに物かおもはむ。人麿の戀の歌なり。路傍の思草を見て、思草はとまれかくまれ、我は既に戀路に踏出したり、何をか思疑躊躇せんや、といふやうに戀心を高調せるなり。此句はそれに俳諧を加へて、思草はもとより、狼の鳴く聲して道のほどさへ危まるれど、今更に又何をか思はんやと云ひたるにて、何思草とつゞけたる七字、前句の

すさまじき女とつゞけたるにも勝りて、僅々十四文字に境界心緒ことごとく現はれたる、語勢詞氣、靈妙人を驚かすものあり。但し萬葉集の、時代遠く隔たりて人の耳に疎くなりたるに際して、尾花が下の一首のみを踏へて此句ありとすれば、おのれ一人の合點にて人には聞えぬ勝なるべければ、作者みづからは做し得たりと思ひても、打出しては示し難き句なり。然るに當時人麿の尾花が下の歌に本づきて、おもひ草と題せる本調子の俗曲ありて世に行はれ居たり。曲の詞に曰く、長い刀をばしや、とさして、逢はれぬ中を文にてかよふ、いつそ此身はもみくしやにして、死なば野中の身は朝露と消えてはかなくなり行くものを、なにが残りて罪とはなるぞ。此の情感激越、生を捨て命を輕んじて愛慕の誠を成さんとする意の曲の名をおもひ草といへるなれば、それを兼ねて、人麿の今更になに物か思はむといへる語をあやどり、何思草狼の鳴く、と緊勁の音、鐵絃の響くが如くには作れるなり。曲詞中の、いつそ此身はもみくしやにして死なば野中の、とある其の野中より狼の鳴く聲を聽取り來れる野水の詩骨も稜として聳えたりといふべし。曲詞は増補松の落葉卷

五、古來、中興、當流はやり歌の部に出でたり。松の落葉は元祿十七年に世に出たり。其中の古來、中興、當流の部に出づ、曲の猿蓑の頃に行はれ居たりしこと猜知すべし。扱又此句、前句より續きては、前句の女、智恵もはかなく戀に竭きて、終に曠野に迷ひ出たりと、古歌俗曲の男を女に翻して解するも一解なるべく、又、僧や、寒く寺に歸るかに對して、猿引の猿と世を経る秋の月の如くに對附にしたりと解するも一解なるべし。前句にすさまじきなど、古き物の由緒ある語を用ゐたれば、此句に何思草など、同じく由緒ある語を用ゐて附けたるも、正式連歌以來の慣例に従ひて、おとなしき仕方なり。此折の戀の句は、素湯を呑むやうなるは宜しからず、此句のほどの力ありて卷の體を成すなり。

夕月夜岡の萱ねの御廟守る

芭蕉

變化自在にして而も一毫の無理なく、夕月夜、小丘、萱、尾花、御廟、手爾波一つ無くても前句と善く附きて、其景其人、目の前に髣髴たり。殿よりの文には芭蕉も心苦みたらんが、思草には眉も伸びたらん。

人もわすれしあかそふの水

凡兆

赤そふの水は赤澁の水なり。易に所謂邑を改めて井を改めずといふもの、無禽の舊井を點出舉似せる、好し。

うそつきに自慢いはせて遊ぶらん

野水

人のわろきことながら、をかしみ深く、たゞこれ世相の寫實なり。誇りかに赤澁水の講釋するもの、それを誘きて聽きつゝ、閑を消する者、兩者の傍にあるもの、かゝる事世に多し。滑稽の雜の句、是の如きも有りて好し。

又も大事の酢を取出す

去來

前句にての遊ぶは消閑なり。此句よりは弄ばれたるになるなり。誇張談をなせる人の、日本一の鱒の鮓など又取出して振舞ふなり。前句だけにてよし、此句あるに至りてあくどし、鮓を供する人最も好き人となれり。句も前へ

戻る氣味あり。

堤より田の青やぎていさぎよき

凡 兆

名物の鮓を客に供するや、贅澤なる人の家の樓の上より見たる景なり。堤も田も一望の中に在りて、田のいさぎよき也。

加茂のやしろは能き社なり

芭 蕉

語を下せば即ち蹉過す。かゝる句は解も評も無くて宜しきなり。

物うりの尻聲高く名乗すて

去 來

物賣りの濁聲太く長引かぬところが京なり加茂あたりなるなり。

雨のやどりの無常迅速

野 水

雨やどりしたる人の、雨霽れたれば、物賣は尻聲高く名乗すて、出行き、西東

と忽ち別るゝを觀じて此句ありと解けば、此句は扱、おろかなる句なり。されど雨のやどりは會者定離なり、と作りあるにもあらず。そは聽くことの甚だ稚きなり、句の稚きにはあらず。此句は寺門などに雨やどりしたる寫實にして、前句の物賣の此處に雨やどりして忽ち出行きたるを、觀想の體にて無常迅速といへるにはあらず。はらく、雨に物賣は急ぎて我が前を名乗すて通り行けるなり、我は雨やどりせるなり、其の宿れるところは、禪庵様の構にて、そこに無常迅速の文字ありたるなり。無常迅速生死事大云の禪宗常套の文句、道心を勵ます短き警策を板などに彫りて、人の目に着きやすきところに掛け置くこと、禪庵居士の家などに得てあることにて、これを禪板など俗に稱へ、又同じものゝ室内のは其文を時々換へたきより漆板になし置きて、墨又は胡粉もて書くやうしたるもあるなり。一句は、前句の名乗すてといふに、人のそはそはしき風情を見出し、俄雨と見定めて雨やどりを出し、阿彌陀堂としても藥師堂としても宜しかれど、古みを去りて新しき寫實ぶりに、雨のやどりの無常迅速とはしたるなり。宿りのゝの文字味はふべし。しかも禪板の一語、おのづ

から前句の風情に響きあひて、阿彌陀堂など拈出したらんよりは手も眼も利きたるなり。但し釋教の附、少し早き歟、それとも忌まぬこと歟。難すべきにはあらねど、此小卷の中に芭蕉一人して三度も身といふ字を用ゐたるなど、すべて細かき斟酌を用ゐあらざるは、例の芭蕉のたゞ詩美を重んじて詩式を重んぜざるよりの故か。

晝ねふる青鷺の身のたふとさよ

芭蕉

前句の雨の庵なり寺なり家なりの在るところを、自然に詩眼裏に映し出し來つて此句の一半あり、又前句の中の捕捉し難き無象の或物に應じて此句の一半あり、半々渾融して、打成一片、幽光潛發し、微涼暗傳す。一卷も末に至りて、此句を得て振ひたり。

しよろく／＼水に藺のそよぐらん

凡兆

前句に副ひたるまでながら、一句の仕立甚だ宜し。鷺は晝眠れるなり、眠未

だ必ずしも全く眠れるならず、藺は潺々の水に立てるなり、戦ぐも未だ必ずしも明らかに戦がず。晝ねむる、そよぐらん、不決定にしたる、らんの一語、妙きはまれり。言語は言語にあらず、生命なり。聲字實相の義、こゝに現前せりとも云ふべし。

絲櫻腹いっばいに咲にけり

去來

此處は花の句あるべきところなるを、花とはいはで、芭蕉に許されたること去來抄に見えたり。句悪しからず。腹いっばいの卑語、用ゐ得て大に好し。さなきだに垂るゝが性の絲櫻の、腹いっばいに咲ける、其のしづかに垂れて重げに、水の面にも着かんばかりなるさま見ゆ。晴天無風と曲齋の言へるも流石に宜し。暖氣過ぎて庭石の陽炎さへなつかしからぬほどの心地さへするも、腹いっばいの語の力なるべし。

春は三月曙のそら

野水

揚句の常態の句、可も不可もなし。揚句に手柄をせんと思ふも烏辭なることなり。冬の日の揚句、寝られぬ夢をせむる村雨の如きは百卷に一度有無しのことにて、卷末の花の句定まるや否や滞ることなく一卷を成就すれば宜しきなり。此句、三月としたるのみが心あつかひなり。曉臺曰く、凡兆かゝる花のかはりに櫻を附けては世人の惑も有らんといへば、野水此の揚句をつくりて花の心を二句の間に句はせたり、是れ隱顯の法といふべし、但し春色云はんかた無しと。尾張に云傳へたることならん。

(きりくす卷終)

餞乙州東武行

梅若菜鞠子の宿のとり、汁

芭蕉

乙州は大津の人と云傳へたり。驛長佐右衛門の男なりといふ。此句は芭蕉幻住菴に在りし頃のことなるべし。句は乙州が江戸へ行くを餞したるまでの仕にして、古今抄に支考が、道すがらの優遊には梅もあり若菜もあり、鞠子の宿にはとり、汁も有らんと思遣りたる風情ながら、若菜は植物と含類とに結前生後の働きありて、とり、汁は梅若菜の艶を崩す云と云へる、例の言紛らかしの解ながら、おほよそ宜し。たゞし道すがらに梅も有り若菜も有りと云へるは甘心せず、梅はまさに此處に在りて此句ありたるなり、想裏のものにはあらで、眼前のものなり。句法は奈良七重の句、しら、落窪の句などに類して、名詞のみ累ねたる中におのづから情緒を感得せしむ。

かさあたらしき春の曙

乙州

224

梅咲く頃の春の驛路のさまにて、言外には餞別の情を謝し、いさぎよく門出する心地をあらはしたり。

雲雀鳴く小田に土持頃なれや

珍碩

土持つとは土吊りと同じく、土を持ち搬ぶことなれど、こゝはたゞ春の田働きするを云へり。春田の働きは土を動かすほか無し。雲雀鳴く麗らかなるさま、前句と相應せり。

しとき祝ふて下されにけり

素男

しときは和名抄には黍餅の字を訓めり。祭餅なり。たゞしこゝは神事祭祀を云出でんとはあらず、祝事ある家より白餅を下されたりとまでなり。古は粳米の紛をもて卵形の餅をなすをしときといふ。今の俗猶ほ鳥の子餅

を祝儀に用ゐるも、古のしとぎの遺なり。こゝは神供として論ずるを要せず、和漢三才圖會、神道類聚名目等を引きて、こちたくしとぎを説かでも、單に祝事ある家、極端に云へば田の耕し初する其家より、今の強飯といふものを賜はりたりといふほどに解して可なり。此頃は糯の餅の、恰も今の鳥の子餅といふやうなるをしとぎと云ひしならんと猜せらる。今かゞみ餅といふも凡そしとぎの類なるべし。前句との附味、自然分明なり。

片隅に蟲齒かゝへて暮の月

乙州

暮の月に蟲齒かゝへたるはをかしき見つけものなれど、しとぎに蟲齒はおもしろからぬ案なり。第四句の神事くさき、第五句の病體くさき、此卷は祖宴の草率なる間に成れるなれば、芭蕉もおほまかには見たるならんが、好ましからぬ表の折なり。

二階の客はたゝれたる秋

芭蕉

225

舊解に戀を隠したる句といへり。戀として釋せずとも、商人宿などの客の立行きし跡のひつそりとしたる體といへる曉臺の解にて通すべし。されど戀くさは免るべからず、又三句は隔てたれど、發句の宿の字に此句の客の字、旅體今少し遠からましかばと思はる。しとぎ以下三句、心得がたし、別に習にてもあることにや。

放ちやる鶉の跡は見えもせず

素男

一句と、のはず、放生會にあひたる鶉にても自由の鶉にても、鶉の跡など見えぬとて何が何ならんや。附味もまたわろし。後の享保頃の風の先驅なるべし。

稻の葉延の力なき風

珍碩

芽立といふ詞もあれば、葉延とも云ひて云へぬこともあるましかれど、耳立ちて宜しからず。されど一句よろしく聞ゆれば、葉のびといふ詞も功を立て

たりといふべし。前句は秋、此句は夏なるべし。

發心のはじめに越ゆる鈴鹿山

芭蕉

一句はさしたること無けれど、前句との附、いかにもおもしろし。山家集下、世をのがれて伊勢のかたへまかりけるに鈴鹿山にて、すゝか山浮世をよそにふりすてゝ、いかになりゆく我身なるらん。この倂なるべし。何丸は鴨長明海道記の、苗代の水にうつりて見ゆるかな、稻葉の雲の秋の倂。すゝか山さしてふる里おもひ寝の夢路の末に都をぞおもふ。二首の歌を引きて、長明には發心集の撰もあれば、此句長明のおもかげなりと云へり。考へすぎたる説ならん。去來文の西行が倂といへる説のかたもとより宜し。此句前句と理路事縁の何の附くところ無きにおもしろく附きたり。かゝる附け方、毎句にあるにはあらず。然るを後の蕉門の徒、みだりに此手筋の妙を發せんとして、鶉の眞似する鳥となり、あたら水に溺れ波に死して、終に誹諧連歌をあらぬものとなしたり。

内藏頭は誰と定まるべからず、去來抄に、芭蕉曰く、誰ぞが倂ならんと。此句は下手の碁の子を下すに必ず他の下したる子に着きて下すが如く、前句に絶りつきて情を求めたる句なり。發心して鈴鹿を越ゆる人に追つきたる人の、内藏頭かと聲かけたるに、其聲聞きて誰ぞと顧みたるところを云へり。曲もなく興もなく感も無く、如何にも初心者の草率に作りたる句なり。これを類聚國史に、任加茂祭主於永權内藏頭とあるを引き、加茂の縁を取りて内藏頭かと疑ひたりとして、あくまで長明の上とせんとしたる何丸の鑿説は、此句と共に如何にも附いてまはりたることなり。何丸此句を評して曰く、妙々の妙と謂つべしと。妙々の妙にはあらず、附味も古くさく、句づくりにも妙なく、凡々の凡なるべし。水口の善福寺は長明發心の寺なりといへど、定めて長明とせんには、一句いよく、新聞雜報の如くになりて、俳諧連歌とはならぬ也。

内藏頭は武士などにもあるべき名なれば、軍陣の事に轉じたるは作者の働きて、一句の仕立に骨折りたるは流石に珍碩なれど、前句餘りに淺露なれば、卯の刻も箕の手も甲斐無し。これを小西攝津守の臣に小堀内藏頭といふが有りて拔驅したる倂なりなど釋するに至つては、俳諧を軍書の拔萃となして顧みぬものなり。珍碩は逸物と呼ばれたる作者なり、何ぞ内藏頭といふ一名稱を捉へて小西方と附くるが如き幼きことを敢てせんや。呼ぶ聲は誰といへるに引かれて、濃霧一天を籠めて兩軍互に動かざりし慶長三年九月十五日の關が原の大戰を思寄せ、扱こそ卯の刻と置き、小西方とは置きたるなり。關が原の戰は霧深くして東西相視る能はず、辰巳の刻より霧晴れて天下の大戰は火蓋を切りしなり。小西行長に何の用は無けれども、西軍の猛將として聞えたるものなれば、肅然として戰を持つたる一陣といふ意にて其名を假りしまでに、前句の内藏頭をも使番物見物頭などの馬上の一士に有るべき名

として扱ひたるなり。箕の手は陣形なり、星宿の箕にあらず。詩、史記等を引きて、箕宿として解するも、箕の手といふは語を成さず。みの手と訓むべし。箕の手は箕の形を爲すをいふ。梯形の最長邊の除かれたる形、又は半月の長さやうなる形を箕の手といふ。矩の手、鍵の手などいふ語を合せ考へて知るべく、將棊の陣法にも箕の圍といふが有るなり、皆其形を云ふ、天文にあづかるにあらず。學匠めかして、箕を教客と爲すなどいふ語を引き、手近き邦語をさし置きて釋せるは笑ふべし。皆是れ小堀内藏頭は小西行長の臣といふところより誤れり。前句人顔の定かならぬさま、此句關が原の如き大戰の未だ發せざるところと曉るべし、興趣おのづから存せむ。

すみきる松のしづかなりけり

素男

空すが／＼しく青みわたり行く中にむら／＼松の寂として黒きが雲すきに見えたる景色、諸軍の鳴りをしづめて雄卒豪將の慘として聲無きさま、僅々十四字、よく之を云取りたり。思切たる死くるひ見よといへる句に、青天に有

明月の朝ぼらけ、と附けたるにも似て、附味も宜しく、一句立もよろし。

萩の札薄の札によみなして

乙州

萩薄の札とは十種香の札なりとの釋もあれど、去來文に撰集抄の故事を取申候とあるに従ひて解すべし。撰集抄卷五、禪門僧山居往生事の條に、永曆の末の八月の頃、信濃國佐濃のわたりを過ぎしに、道のほかに少し草かたふくはかりに見ゆる徑ありて、其奥に秋草を引結びて庵なせる僧あり、手折りて庵につくれる草々に紙にて札をつけ、札に歌をよみなしたり。西行、庵主にいづくより爰へは來りたまふにやといふに、此春よりとばかり答へて言はず。別れて川上に至るに一町あまりにして別に又一庵あり、庵主座化せり。西行前の秋草の庵の僧の同行ならんと思ひて、此事を告げ、其の辭世の吟を示すに、僧これを聞きて睡るが如くに終りしかば、隨緣法施して二人を茶毘し、骨を高野へ納めし由の記事あり。厭欣の念まことに強くして、生死に自在を得たる眞の道心者として讚歎し、貴き人々あまた見しかどもかゝる人に未だ會はず侍り

き、と記せり。春の日の中の句に、足あとに櫻を曲る庵二ツといへる難解の付
あるも、此春よりといへる言葉をたよりて、此二僧のことを踏へて作りたる感
傷の吟とおぼしく、此句は又殊に明らかに秋草の庵の主人の、寂然として全く
世念無きところを、前句のすみきる松の静なりけり、といへる徹底して清らな
るところに附けたるなり。萩の札には、萩の花うつろふ庭の秋風に下葉もま
たで露はちりつゝ。薄の札には、薄しげる秋の野風のいかならむよなくむ
しの聲のさむけき。乙州此句、一句の仕立に妙は乏しけれど、能く前句を看て
徹して、蕉風に附け得たり。

雀かたよる百舌鳥の一聲

智 月

たゞ是れ秋天高く澄みて萩薄のあはれ歌思詩情を惹くこと多き野山の景
中おのづから肅殺の氣を含むところを、百舌鳥の緊しく勁き聲に聞取りて、雀
かたよるとは面白く作れり。後京極攝政の秋篠月清集一、すそ野には今こそ
すらし小鷹狩山のしげみに雀かたよる。此歌の詞を取りたるにや。取らで

もおのづから成りもすべし。智月は乙州の母なり。此卷此前句までにて一
座は果て、此句より後は便宜につけて人々よりくゞに續けたるかとおぼし。

懐に手をあたゝむる秋の月

凡 兆

前句を喧嘩の中へ強き者の入りたるさまとして、此句どてら姿の傲れる人
として解するものあり。なぞらへ附といふも無きにはあらねど、手をあたゝ
むるといへる詞遣、俠客を云へるにあらぬこと明らかなり。たゞ漸寒の時節
の夕の態なるべし。

汐さだまらぬ外の海つら

乙 州

舊解に瀬戸の内ならぬ海を外の海といひ、潮汐干満定まらずといへり。海
路用心記、和漢三才圖會等、潮汐の事を述べたるも多し。然れども内海なれば
汐定まり、外海なれば汐定まらぬといふことも實は無し。内海にても風によ
り位置により汐定まらぬことあり、之を潮ぐるひといふ。外海にてもおよそ

の汐は定まりあるものなり。春秋の潮汐は特に大なり、何の定まらぬといふことあらんや。此句たゞおほよそに見るべし。前句大船の上にて天氣風向潮合等を観る風情なれば、汐の流の少し心に叶はぬところあるよしを曲折して云へるまでなり。沖に大風ある時は汐ぐるひするものなり。又瀬戸内ならぬを外の海といふのみならず、内海にても一定の區劃おのづから存して輪の内、輪の外といふことあり、輪の外を外の海といふ。又いづくにても大洋を外の海といふ。強ひて瀬戸内外を論ずるにも當らじ。秋の望夜は一年の内にも潮汐の最も動く時なれば、舟人の心を用ゐて日和を見る姿として此句は作られたるなるべし。

鑓の柄に立すがりたる花の暮

去 來

落武者の浦舟をさし招く傍に咎むる敵も居合さぬ花の暮と解するものあり。又三州遠州駿州あたりの大海ぞひの街道に立てる鑓持の風情と解するものあり。一騎駈の若武者の敵を追來て見失ひたる姿と解するものあり。

此句の如きは解者の自由に觀じ得べし。辯護の餘地はあれども暮の字穩妥ならず。

灰まきちらすからし菜の跡

凡 兆

前句の人を門外に控へたる供の者として、こなたはこなたの爲せることを附けたり。まきちらすの語氣に、委細かまはぬ風見えたり。

春の日に仕舞てかへる經机

正 秀

仕舞て歸るは春の千部轉讀を終へて歸るなり。經机など取片づけ果て、寺男のからし菜取り果てたる跡へ灰打まきて更に何か播かんとなり。

店屋物くふ供の手かはり

去 來

供は從者なり、手かはりは時に代りて役立つ者なり。店屋物は宿場の食物にて、てんやものと訓む。一句の情や、不明なれど、人々雜沓のさまなれば、前

句を大法會、または晋山式など、見て附けたるなるべし。句響、走りなど云ひて、かゝる朦朧たる附方をすること、曠野あたりより漸く多くなり、其の優れたるは甚だ面白けれど、其の凡なるに至りては、興も無く意も疎く、聾話などの如くなりて、終には其弊掩ふべからざるに至り、句響、走りなどのことを葛の松原に誇りかに説きし支考も、後には、附句は附くるものなり、今の俳諧附かざる多し、先師の句に一句も附かざるは無し」と云はざるを得ざるに至り、同じく句響のことを云へる去來も、附句は附かざれば附句にあらず」と云はざるを得ざるに至れり。此句など、附かざるにはあらず、されど其のおぼろげにして、芭蕉の所謂律義さ缺乏し、上手めかして淡きこと水の如く、しかも何の妙味といふほどのものも無きところ、後の退屈俳諧の端を開けり。

汗のごひ端のしるしの紺の絲

半 殘

宿場の混雜、雜輩の言争ふさまなり。

わかれせはしき鶏の下

土 芳

汗ぬぐひをほの闇きに尋ぬる也。それには端のしるしのあれば忘れて人目にかゝり口の端にかゝりてはならじといふをかしみ、詫びてをかし。紺の絲じるしも田舎めき、鶏の啼の下もまことに田舎めきてふさはし。鶏の聲に別るゝは歌物語の常にて新しみもなきに、鶏の下としたる、俳諧の新しみにて、しかも情境生動して真に逼り、伊勢物語の夜も明けばきつにはめなんくだかけの未明になきてせなをやりつる、の歌を踏へて、それより一步すゝみたり。

大膽に思ひくづれぬ戀をして

半 殘

伊勢物語の同じ十三段、前の女、京の人を切に思ひて、中々に戀に死なずば桑子にぞなるべかりける玉の緒ばかり、と詠めり。歌さへ鄙びたれど、流石に哀なれば男、其心を汲みて取りたる其事を踏へて、叶ひがたき戀に猶ほ思ひくづれぬさまを、いよく鄙びて、大膽にと作れる、作意はさしたる事なけれど、仕立

柄宜しければ、人々の賞美する句となれり。

身はぬれ紙の取所なき

土 芳

前句の女の悲歎に暮るゝところなり。前句の心へ潛み入りたる句にして、附方少しく持つて廻りたるやうなれども、かゝる附方もあるなり。一句の姿おもしろく情深ければ、前句にも増して世の感賞するところたり。取所無きは、徳も貌も才も藝も、門地も財力も、すべて無しと自ら悲むなり。

小刀の蛤刃なる細工箱

半 残

蛤刃は鋭からで丸みを持ちたる刃形をいふ、切味甚だよろしからず、素人細工の用ゐるところ多くは是也。されば此句即體の句にて、何を爲しても取所なしといふさまなりと解する人多し。別解ありて曰く、蛤刃とあり、細工箱とあり、蛤刃の小刀は皮の毛をこそげ去るに用ゐるなり、鋭き小刀は皮を傷つくればにて、前句をいと賤しきものとして、皮革の細工する者を附けたりと。鑿

説ならむ。皮革を治むる者果して蛤刃の小刀を用ゐるや否や、詳しく知らずと雖も、必ずしも然らざるべしと思はる。又別解あり。曰く、職人盡歌合に、いつまでかはまぐり刃なる小刀のあふべきことかなはざるらむ。此歌を裁入れて、前三句の戀を、こゝに離れて、職人の態を云へりと。細工箱といふ詞あれば、素人細工と云はんよりは此解や、宜しかるべし。作者半殘山岸重左衛門は藤堂藩士にして芭蕉の姉婿、當時の世に行はれたる職人盡歌合などに疎かるべき人にもあらず。又これより少し後に大場寥和の俳諧職人盡あり、職人盡の世にもて囃されしことを知るべし。蛤刃のあはぬといふは、すべて刃を表裏より研ぎつくるをあはすといふより、蛤刃の鈍く圓なれば、あはぬとは云ふなり。刺刀を合はす、寝た刃をあはす、合せ砥などいふ辭を考へて知るべし。濡紙、蛤刃、取所、合所無し。理路は不明なれど、附く味あり。曲齋の如く強ひて糊細工とするにも當らざらん歟。

棚に火ともす大年の夜

園 風

大晦日の年棚つりて燈明をあげたる體、拙きにせよ職人の家の、また農商とは別なるおもむき也。

こゝもとは思ふ便も須磨の浦

猿 雖

源氏物語須磨卷、獨り目をさまして枕を欹て、四方の嵐を聞きたまふに、浪たゞ爰許に立來る心地して、とある其の爰許といふ詞を裁入れたるにや。されど裁入れたるにしても其甲斐もなく、おもしろみも少き句なり。一句も佳ならず、附味も妙なし。

むね打合せ着たる肩きぬ

半 殘

曉臺曰く、都の姿も無くなりたるさまを云へり。

此夏もかなめをくゝる破扇

園 風

扇の要の釘の脱けたるあとを紙捻などにてくゝれるなり。貧なる浪人

等の態なること、いふまでも無し。

醤油ねさしてしばし月見る

猿 雖

ねさしてはなれさしてなり。醤油を造るの法、小麥を焙りて之を磑碎し、煎爛したる大豆に糝和して、之を「をかむろ」に入るれば、四日を経て黄色の花を着く。ねさするとは窖に入れ終へてなり。此等の操作、秋より冬に至るの間に於てするを常とす。醤油ねさして暫し月見るの情、知るべきなり。蟹目をくゝりし古扇はたゝと、此の克く勤め克く儉なる頑強老人の月を仰いで自ら足れりとするさま、田舎には得てある圖なり。

咳聲の隣は近き縁づたひ

土 芳

咳聲、せきごゑと訓ますにや、しはぶきと訓ますにや。人靜かなるさまなり。月の頃の咳聲、稀ならぬことなり。

添へばそふほどこくめんな顔

園風

242

こくめん、こくめいに同じ。實體なと云ふがごとし。許六曰く、添へば添ふほどは、見れば見るほど、したしと。好悪褒貶は人々の随意ながら、添へば添ふほどにて、夫婦一室にありて隣の咳聲を聞きたるさま如實に現はれてをかし。

形なき繪を習ひたる會津盆

嵐蘭

形なき繪は粗笨無我にして何とも分らぬ繪なり。會津盆むかしはたゞ髻りたるまでの盆に、何とも知れぬ模様を描きたるものなりしなるべし。故にかゝる句ありしなり。こくめいの人の形なき繪を習ひたる、甚だをかしく、世にかゝること有り。

薄雪かゝる竹の割下駄

史邦

竹の割下駄は太き丸竹を節二つ入れて切り、縦二ツに割りて一足左右とす。茶人のわびたる庭下駄なり。其竹下駄に薄雪かゝれる、雅致愛すべし。會津盆とのうつり、俗を離れたる物好、おもしろし。

花にまた今年のも定まらず

野水

薄雪の小庭に見えたるほどなれば、二月つめたくして、花の旅に今年の同行者も定まらぬとなり。

雛の袂を染るはつかぜ

羽紅

一句艶美平和の景情をあらはさんとて詞を文どりて斯く句作りせり。○此卷おもしろき句もあり、又甚だおもしろからぬ句もありて、一卷駁雜なり。芭蕉の潤削も及ばず、心添も足らずして、是の如くなるを致せるなるべし。猿籠の中に芭蕉の心に叶はぬ卷ありと云傳へたるも、おそらくは此卷などなるべし。

(梅若菜卷終)

243

昭和四年十二月五日印
昭和四年十二月十日第一刷發行

ひさこ 猿蓑抄
定價貳圓貳拾錢

(片山製本)

版權所有	

著者	幸田露伴
發行者	東京市神田區一ツ橋通町三番地 岩波茂雄
印刷者	東京市神田區錦町三丁目十七番地 白井赫太郎

精興社印刷

發行所

東京市神田區
一ツ橋通町三番地

岩波書店

電話(33)二二〇〇八番
九段(33)二二〇〇九番
二番(小)二六二八一番
振替口座東京二六二四〇番

目書句俳歌詩店書波岩

幸田露伴著	冬の日の抄	定價二四十三錢 送料書留十八錢
幸田露伴著	春日曠野抄	定價二四十五錢 送料書留十七錢
沼波瓊香編 石校訂	芭蕉全集	定價四四十八錢 送料書留廿七錢
勝峯晋風著	芭蕉七部集定本	定價二四八十錢 送料書留廿七錢
沼波、太田、阿部、幸田著	芭蕉俳句研究	定價二四五十錢 送料書留十八錢
安橋、小宮、勝峯、和辻著	芭蕉俳句研究	定價二四八十錢 送料書留廿七錢
幸田、太田、沼波、阿部著	續々芭蕉俳句研究	定價二四八十錢 送料書留廿七錢
幸田、小宮、勝峯、和辻著	續々芭蕉俳句研究	定價二四八十錢 送料書留廿七錢
山田、阿部、小牧、村岡著	芭蕉俳諧研究	定價二四八十錢 送料書留十八錢
太田、小宮、土居、關崎著	芭蕉俳諧の根本問題	定價二四八十錢 送料書留廿七錢
荻原井泉水著	奥の細道評論	定價二四二十錢 送料書留十八錢
荻原井泉水校訂	しだら	定價九錢 送料六錢
東松露香校訂	父の終焉日記	定價八錢 送料四錢

目書句俳歌詩店書波岩

佐佐木信綱編	分類萬葉集近刊	
井手今滋編	橘曙覽全集	定價二四八十錢 送料書留廿七錢
大島花東編著	良寛全集	定價五十四五十錢 送料書留廿七錢
正岡子規筆	仰臥漫錄品切	
島木赤彦著	萬葉集の鑑賞及其批評前編	定價一四十八錢 送料書留十八錢
島木赤彦著	歌道小見	定價一四五十錢 送料書留十八錢
太田水穂著	短歌立言	定價二四二十錢 送料書留十八錢
島木赤彦著	氷魚	定價二四五十錢 送料書留十八錢
島木赤彦著	柿蔭集	定價二四十八錢 送料書留十八錢
中村憲吉著	しがらみ	定價一四八十錢 送料書留十八錢
藤澤古實著	國原	定價二四六十錢 送料書留十八錢
結城哀草果著	山麓	定價二四三十錢 送料書留十八錢

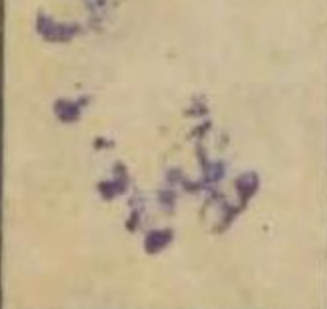











目書句俳歌詩店書波岩

島田忠夫著	童謡詩柴木集	定價一円七十錢 送料書留十八錢
佐藤恭輔編	五城句集 附短歌	定價一円五十錢 送料書留十八錢
夏目漱石著	漱石詩集 附印譜	定價二円八十錢 送料書留十八錢
寺田寅彦・松根豊次郎・小宮豊隆著	漱石俳句研究	定價二円二十錢 送料書留十八錢
夏目漱石著	漱石俳句集	定價一円五十錢 送料書留十八錢
茅野雅子著	金沙集 品切	
木下利玄著	木下利玄全歌集	定價二円八十錢 送料書留十八錢
アララギ同人編	アララギ年刊歌集 第五近刊	定價一円五十錢 送料書留十八錢
アララギ同人編	アララギ年刊歌集 第四	定價一円五十錢 送料書留十八錢
アララギ同人編	アララギ年刊歌集 第三	定價一円五十錢 送料書留十八錢
アララギ同人編	アララギ年刊歌集 第二	定價一円五十錢 送料書留十八錢
島木赤彦編	アララギ年刊歌集 第一	定價一円五十錢 送料書留十八錢

585
117

5年 / 月 17日

439

調查濟

